

モトとナカ

—副詞的用法をめぐる—

長谷部 亜子

1. はじめに

1.1 問題の所在

モトとナカは、ともにトコロ性を持つ名詞、すなわち空間名詞である。

(1a) 青空のモトで本を読む。

(2a) 部屋のナカで本を読む。

(1a) は屋外で読書するという意味に、(2a) は室内で読書するという意味になる。この各文におけるモトとナカをそれぞれ入れ換えたものが次の(1b)(2b)である。なお、各例文の下線はモトおよびナカを修飾する部分である。

(1b) 青空のナカで本を読む。

(2b) *部屋のモトで本を読む。

(1b) は空中で読書するという意味に、(2b) は非文になり、(1a) と(1b)、(2a) と(2b) ではそれぞれ意味が異なることがわかる。

しかし、次の例文(3)(4)のように、モトとナカがその前に同じ修飾句を伴い、類義表現になる場合がある。

(3) 厳しい状況のモトで、子どもたちはがんばっている。

(4) 厳しい状況のナカで、子どもたちはがんばっている。

(3) 厳しい状況のモトも(4) 厳しい状況のナカも、述部の主体「子どもたち」が「がんばっている」場や範囲を指している。

形式の面では、ともにその前に修飾句

を伴い底の名詞(～モト／～ナカ)になるという特徴をもつが、修飾句の要素として許容されるものには違いがある。

(5) *忙しいモト、彼は来てくれた。

(6) 忙しいナカ、彼は来てくれた。

(5)(6)のように修飾部分が形容詞の場合、モトは許容されないがナカは許容される。

1.2 研究の目的および方法

これまでに空間名詞の意味や機能を扱った研究は複数あったが、モトとナカを類義表現として扱ったものはない。そこで、本論文では両者を類義表現として取りあげ、意味、用法上の共通点と相違点を指摘したうえで、表現効果の違いについて論じる。

前出(3)(4)のように両者が類義表現として解釈される場合、次の共通する特徴がある。

①名詞修飾句の底の名詞となる

②名詞修飾句全体が副詞句としてその文の述部(以下V)を修飾する

本論文ではこの要件を満たすものを副詞的用法とし、これらを扱う。また、類義表現を論じる前に、その背景となるそれぞれの語の多義性についても先行研究を踏まえ触れる。

なお、本研究の分析にあたっては現代日本語書き言葉均衡コーパス(検索デモ

版)から用例を抽出し用いた¹⁾。しかし、紙幅の関係により本論文中的用例は特にことわらない限り筆者の作例とした。

2. モトの意味と形式

2.1 モトの多義性と先行研究

長谷部(2010a)では、プロセス性の有無によってモトの多義構造を示した。そのうち本論文の対象となる副詞的用法にあたるものは以下の例文(7)(8)(9)で、これを扱ったものには方(2008)²⁾及び長谷部(2010b)³⁾がある。

(7) 青空のモトで本を読む。

(8) 岡田監督のモトでコーチを務める。

(9) 患者のモトに救急車が到着した。

ここでは、上記の先行研究を踏まえ、まず各用例の意味の関連性について述べる。なお、(7)～(9)を始め、この用法は前接する修飾句の多くが「名詞句のモト」(以下「Xのモト」)という形式で表される(次項2.2.1参照)ことから、以下名詞句Xの意味に注目し、論じる。

(7) 青空のモトの場合、青空が物理的に上に位置し、モトは物理的にその下に位置する範囲を示している。つまり、両者の間には物理的な上下関係がある。本論文ではこのようなものをA類とする。

(8)の岡田監督は、それ自体が物理的に上に存在しているわけではない。この例での岡田監督は、述部「コーチを務める」の主体に対し支配的立場にあり、概念的に(ここでは社会的地位が)上位にある。ゆえに、ここには支配の上下の概念メタファーが関与しており、Xとモトの間には支配―被支配と概念的な上下の関係が成り立つ。また、「Xのモト」全体は、〈Xの支配を受ける範囲〉や〈Xの概念的

な下〉を意味する。これをB類とする。

(9)の場合のモトは、単にXの〈存在場所〉を意味している。モトはXが支配する範囲、つまり存在する場を示しているにすぎず、両者間に支配性はあるが上下性はない。このようなものをC類とする。このC類に属する名詞は主に人であるが、動物や建物、車なども稀にある。

なお、(10)は前接する名詞句が、B類の(8)と同じ岡田監督であるが、この場合C類に属する。このように同じ名詞がB類にもC類にも解釈可能なものがある。

(10) 岡田監督のモトに手紙が届いた。

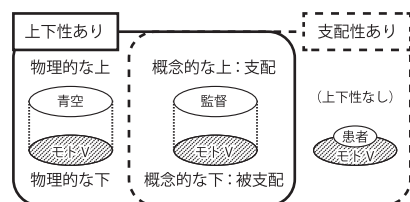
以上、修飾部分であるXとモトの間にはXの性質によって表1に示す意味特徴があり(長谷部2010a)、A～C類は意味的に関連している(図1)ことを述べた。

【表1】XのモトV：Xとモトの意味特徴

例) Xのモト (Xの意味): 類別	X-モト間の 上下性	X-モト間の 支配性
(7) 青空のモト 〈物理的な上〉: A類	+	—
(8) 岡田監督のモト 〈概念的な上〉: B類	+	+
(9) 患者のモト 〈人・稀に物〉: C類	—	+

(長谷部2010aを改訂)

図1 XのモトVのイメージ



ところで、B類には下位分類がある(長谷部2010b)。これは、B類には共通して支配の上下の概念メタファーが関与しているが、名詞句Xの意味によって支配のありようが異なるためである。以下にB類の下位分類に該当する例を挙げる。

・B1類

(8) 岡田監督のモトでコーチを務める。

Xに入るB1類の名詞は、支配的な立場や力を持つ者や物、組織などがある。これらは、社会的関係や親子関係などにおいて述部の主体(「コーチを務め」た者)よりも概念的に上位にある名詞である。

・B2類

(11) 岡田監督の指導のモト、選手は個々の力を伸ばした。

B2類は、B1の語群を主体とし、その行為を示す動詞派生名詞がXに入る場合で、行為による支配を含意する。

・B3類

(12) 日本経済は、今厳しい状況のモトにある。

B3類に属する名詞には、(12)の状況のほか、環境といった語がある。この類の語はそもそも上下性を含意しない語であるが、モトとともに使われることにより上下性が付加され、同時に述部の主体の行為を支配する意味になると考えられる。

・B4類

(13)「人間尊重」というスローガンのモトで学校教育を展開する。

(13)は二通りの上下のメタファーが複合的に関与していると思われるケースである。スローガンというある種の思考が述部の行為を支配すると考えれば、B1～B3類と同じように支配の上下のメタファーが関与していることになる。しかし、スローガンというのは目標や理想の一種であることから、異なる上下のメタファー「理想のメタファー」(鍋島2008)の関与も考えられる。「理想のメタファー」とは、理想は上で現実とは下であるという上下の概念メタファーであ

る。本論文では(13)のような場合、どちらか一方というよりは双方が関与しているとみなす。

【表2】XのモトV：名詞B類の下位分類⁴⁾

下位分類	どのような名詞が〈概念的な上〉か
B1類	支配的立場・力を持つ者・物・組織
B2類	支配的立場・力を持つ者・組織の行為
B3類	支配的な状況・環境
B4類	理想・目標などの思考 (思考による支配または鍋島2008「理想のメタファー」)

いずれにせよ、A～Cに分類されるものは、先に挙げた本論文の分析対象となる副詞的用法の要件を満たすと同時に、図1にも表したとおり、モトの作りだす名詞修飾句が述部Vの行われる際の範囲を示すという点で意味的にも共通する。

また、この用法は単に範囲を示している場合もあるが、方(2008)が述べているように、できあがった名詞修飾句が、述部Vの〈根拠〉や〈理由〉、〈条件〉など「論理的な関係性」を示す役割を果たす場合がある。このような役割を果たすとき、例えば(11)の例では〈岡田監督の指導を受けて〉という意味に解され、その場合、より副詞的にとらえられる。

2.2 ～モトVの形式特徴

ここでは前述のコーパス(以下、用例に用いた場合はKと表示)の用例約7000例⁵⁾の分析を踏まえ、～モトVの形式特徴を次のふたつの観点から記す。

①～モトVの前接部分

②～モトVのモト部分に後接する格助詞
なお、モトもナカも名詞性を有する語であることから、前接部分は、名詞、形容詞、形容動詞、連体詞、動詞などの形式が接続すると考えられる。

また、同様の理由により、後接助詞にはあらゆる格助詞が接続可能と考えられ

る。しかし、**モト**も**ナカ**も、後接部分が格助詞を伴わない例が見られた。以後の項では、この点も考慮に入れ考察する。

2.2.1 ～モトVの形式特徴①前接部分

前接部分に関してコーパスの用例から明らかになったことは、**モト**を修飾する部分が「名詞Xの**モト**」という形式にほぼ限定されるということである(表3)。

実際には、表3に示すように、名詞以外の品詞が接続する用例がなかったわけではない。しかし、名詞接続に比べ、それ以外の品詞が接続するケースは圧倒的に少ない。その上、(14)(15)など名詞以外の品詞が接続する場合、意味は理解できるものの、やや違和感がある。

【表3】コーパス：～モトVの前接部分の品詞別内訳

品詞	表現例 ()内は各用例の内訳	用例数 計6202※
名詞	→【表2】	6129
形容詞	悪い(1)、小さい(1)	2
形容動詞	—	0
連体詞	この(7)、その(41)、 このような(1)、こうした(1)、 そうした(1)	51
助動詞派生	…というような(1)	1
動詞	形 進行する/している(2)、 増加する/している(2)、など (計9例)	11
	た形 奪った(1)、進展した(1)	
その他	…という(3)、こういう(1)、 そういう(4)	8

※モト部分がひらがな表記「もと」の場合の全用例数

(14)(略) 北海道の現地は現在大変厳しい寒さでございまして、積雪でございますとかあるいは凍結といつたような大変条件の悪い**モト**ではございますが、復旧工事のための測量あるいは設計等につきまして現在鋭意進めております。(K)

(15) 第三に、少子高齢化、核家族化、共働き化、地域的紐帯の希薄化などが進行する**モト**で、子育て不安や虐待、子育て環境・条件の不備、家庭内暴

力などの問題がジェンダーの課題をともない顕在化している。(K)

2.2.2 ～モトVの形式特徴②後接助詞

2.1で見たように、**モト**の副詞的用法にはある範囲を示すという共通の意味特徴がある。そのため、**モト**は空間を表す名詞としてふるまい、それに続く格助詞は、通常の格助詞の規則が適用されると考えられる。(16)は通常の格助詞の規則が適用される例であり、二格で表されるのが当然(以下、本来二格⁶⁾)で、それ以外の格助詞をとることはない。

(16) 日本経済は、今厳しい状況の**モト**
{*デ／ニ／*φ} ある。

したがって、以下のことが言える。

(イ) 本来二格はデ格やその他の格助詞および無助詞に交替しない

しかし、デ格(本来デ格)に関して、二格や無助詞で表される例が見うけられる。次の(17)は、デ格、二格、無助詞がいずれも許容される例である。

(17)「人間尊重」というスローガンの**モト** {デ／ニ／φ}、学校教育が展開される。

では、常にこのような交替が可能かというところでもない。

(18) 岡田監督の**モト** {デ／?ニ／φ} コーチを務める。

(18)では、デ格と無助詞は許容されるが二格は許容度が低い。また、分析の結果、デ格は常に無助詞に交替可能であり、その逆も可能であることがわかった。以上をまとめると次のことが言える。

(ロ) 本来デ格は、常に無助詞に交替可能である

(ハ) 無助詞で表されるものは、常にデ格に復元が可能である

(二) 本来デ格は、二格に交替可能な場合がある

(ロ) の無助詞化についてはモト以外の相対的な位置関係を表す名詞類にも見られ、副詞的な役割を果たすとも考えられる(寺村 1978) が、その原因や表現効果等の詳細は明らかになっていない。(二) のデ格から二格への交替現象は、言語学会(1983) の指摘する「情勢的なむすびつき」や「古くささ」⁷⁾ を表す場合に起こると考えられる。このうち「情勢的なむすびつき」の二格で表された場合、モトが作る名詞修飾句が、単に名詞句としてある範囲を指すのではなく、より副詞的にとらえられ、状況を表す。

3. ナカの意味と形式

3.1 ナカの多義性と先行研究

モトと同様、コーパスの用例を分析した結果、ナカには3種の語義があることがわかった。

まず、(19) のたんすのナカは、たんすという物の内部を指している。

(19) 財布はたんすのナカにあった。

(20) 雨のナカ、傘もささずに待っていた。

また、(20) の雨のナカのようにことがらや状況の内部を指している場合もあるため、これらを合わせた意味を語義1〈事物の内部〉とする。

次は、〈ことがらの途中〉を意味するもので、(21)~(23) が該当する(語義2)。

(21) 理屈ではなく練習のナカで、コツをつかんでいく。

(22) 忙しいナカ、彼は来てくれた。

(23) 吉野ヶ里の歴史公園化を進めるナカで、博物館施設をどうするか

の検討が行なわれた。(K)

この用例の特徴は、ナカが示す事象に、時間的な幅があることである。

最後に、〈カテゴリの内部〉という意味になるものを紹介する(語義3)。(24) は語義1の(19)と同じ前接部分たんすので、(25) は語義2の(21)と同じ練習のである。

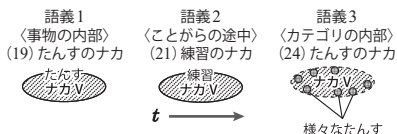
(24) たんすのナカでも、桐のたんすが一番だ。 cf.(19)

(25) 練習のナカで最もきつかったのはうさぎ跳びだった。 cf.(21)

(24)(25) は、個別の「たんす」「練習」ではなく、カテゴリを示し、ナカはその〈カテゴリの内部〉を表す。この読みは述部を中心とした文全体から得られるものではあるが、ナカの意味が関与的であるのもまた明らかなので、ここではひとまずナカの別義として取り扱うこととする。

以上3種の語義について、各意味のイメージを図2に示した。なお、図の斜線部分がナカの指す意味である。

図2 ~ナカVのイメージ



次に、これらの語義を区別する際の根拠となる共通点と相違点を挙げる。

語義1~3の全てに共通する点は、ナカがある事物を空間的、時間的、概念的にひとくくりにとりまとめ範囲を指定し、その内部を指している点である(図2参照)。

語義1・2と語義3の違いは、語義1と2は単一の事物(例えば(19)ではたんす)を対象にしているのに対し、語義3の場合、前接部分の事物は単一のものではな

く同種類の複数の事物を合わせ対象として扱っている点である。

語義1と語義2の違いは先にも述べたが、語義1〈事物の内部〉の場合はナカを修飾する部分の名词がモノ的に捉えられている。一方、語義2〈ことがらの途中〉は修飾部分が時間的な幅を持って捉えられており、コト的な解釈⁸⁾となる。

ところで、この語義1と語義2の違いは、修飾部分が特にことがらの名词の場合においては明確に区別できないことがある。次の(26)は空間的に、つまりモノ的にとらえれば語義1に属する例である。

(26) その発言は自由な雰囲気のナカ
で出たものだった。→ 語義1? 2?
しかし、コト的な(時間的な幅をもった)表現ととらえることも可能で、その場合は語義2となる。前出の(22)(23)の修飾部分忙しいや歴史公園化を進めるは、時間的な幅を持つことから、語義2となる。

このように、ナカがどの語義に属するかは、修飾部分の語の持つ性質がモノ的かコト的かということと関係が深い。しかし、述部との関わりも否定できず、これについては今後の検討課題としたい。

3.2 ～ナカVの形式特徴

3.2.1 ～ナカVの形式特徴①前接部分

～ナカVの前接部分(ナカを修飾する部分)の形式的な特徴は、名词、形容詞、形容動詞、動詞等あらゆる品詞を許容する点である。こうした形式特徴は、名词以外の品詞による接続を極端に許容しないモトのそれとは大きく異なる。

3.2.2 ～ナカVの形式特徴②後接助詞

モトと同様、ナカの後接助詞の問題をとりあげる。ここではモトに合わせて

(イ) 本来二格のその他の格への交替、
(ロ) デ格の無助詞化、(ハ) 無助詞格の元の格、(ニ) デ格の二格への交替といった諸現象が起こる可能性について論じる。

まず、本来二格で表されるものについては、(27)の例からモトと同様(イ)が言える。

(27) 財布はたんすのナカ { *デ / ニ }
あった。

(イ) 本来二格はデ格やその他の格助詞および無助詞に交替しない

次に、本来デ格で表されるものが無助詞化するかどうかという問題を扱う。

(28) はデ格が無助詞化すると許容されず、(29)は無助詞が許容される例である。

(28) 理屈ではなく練習のナカ { デ / *φ }、コツをつかんでいく。

(29) 吉野ヶ里の歴史公園化を進めるナカ { デ / φ }、博物館施設をどうするかを検討が行なわれた。

したがって、次のことが言える。

(ロ) 本来デ格は、無助詞に交替可能な場合がある

次に、無助詞で表されている場合、それは何格に復元が可能なのかという問題を扱う。(30)は、無助詞のものがデ格にもヲ格にも復元可能な例である。

(30) 雨のナカ { デ / ヲ / φ }、傘もささずに待っていた。

次の(31)も、原文では無助詞で表されていた例である。これをデ格に復元することは可能だが、ヲ格には復元できない。

(31) 重苦しい空気のナカ { デ / *ヲ / φ }、土居は腹をくくった。(K)

また、(32)もコーパスの用例で、原文では無助詞で表されていた。この(32)は、デ格が許容されヲ格が許容されなかった

(31) のケースとは異なり、デ格が許容されずヲ格が許容される例である。

(32) 友人より電話があり、「お昼御飯でも一緒に食べましょう」と誘われ、寒いナカ { *デ／ヲ／φ } 急ぎ足で友人宅に向かい、おいしいお寿司をおよばれし、(以下略)(K)

このようにデ格が許容されないのは、述部が「行く」「来る」「向かう」などヲ格要求の移動動詞であることが理由として考えられる。

以上をまとめると、**ナカ**の無助詞の復元について次のことが言える。

(ハ) 無助詞で表されたものは、デ格に復元可能なものとヲ格に復元可能なものの二つがある

このヲ格、デ格の無助詞化は、先の寺村の指摘にもあるとおり副詞的用法とも考えられるが、現時点での明言は避ける。

次は、デ格が二格に交替するか否かという点から論じる。(33) は本来デ格で表されるが、二格に交替しない例である。

(33) 理屈ではなく練習のナカ { デ／*二 }、コツをつかんでいく。

これについては、該当する他の例も例外なく二格へ交替しないことがわかった。したがって次のことが言える。

(ニ) 本来デ格は、二格に交替しない

4. ～モト V と～ナカ V

本節では、これまでの分析結果に基づき、両者の共通点と相違点を意味と形式の観点から指摘し、類義表現となる場合における表現効果の違いを述べる。

4.1 意味に関する比較

両者の意味を比較する際に、前接部分

の名詞句に注目し考察する。その際、**モト**の前接部分の名詞句の区分 (2.1 の A ～ C 類) を基準として用いるが、これは、**モト**と**ナカ**を比較するにあたり、前接部分を名詞句しか許容しない**モト**の接続形式に合わせる必要があるためである。

4.1.1 前接パターン：A 類

A 類は、物理的に上に位置する名詞である。この A 類に該当する次の例では、(34a) は屋外で、(34b) は空中で読書をするというそれぞれ異なる意味になる。

(34a) 青空のモトで本を読む。

(34b) 青空のナカで本を読む。

4.1.2 前接パターン：B 1 類

B1 類は概念的に上に位置する B 類の一種で、支配的な立場・力を持つ者などであった。これに該当する次の (35a) (35b) は、**モト**と**ナカ**を入れ替えた例であるが、a と b の場合とでは述部の主体が異なる。(35a) の例では闘志が燃えたのは鬼監督以外の誰かだが、(35b) の場合、闘志が燃えた主体は鬼監督である。

(35a) 鬼監督のモトで { *鬼監督の／選手の } 闘志が燃えた。

(35b) 鬼監督のナカで { 鬼監督の／*選手の } 闘志が燃えた。

このような違いが起こるのは、鬼監督が実際の存在物でありながら、概念的に上位にあると解釈されるためである。**ナカ**を伴う場合はその物の物理的な範囲 (内部) を指すのに対し、**モト**の場合は、物であっても概念的な意味での上位とその下の範囲を示すのである。

4.1.3 前接パターン：B 2 類

次の (36a) (36b) は前接部分が B2 類 (支配的な立場・力の者の行為) の例である。

(36a) 鈴木先生の指導のモトで、
{生徒たちは／*鈴木先生は} 多
くを学んでいる。

(36b) 鈴木先生の指導のナカで、
{生徒たちは／鈴木先生は} 多く
を学んでいる。

この例から、**ナカ**は前接部分の行為の主体（指導する鈴木先生）と述部Vの主体が一致しても差し支えないが、**モト**は一致しないことがわかる。そして、前接部分の行為の主体と後続の述部の主体が異なる場合、類義表現となる。しかし、類義表現となる場合にも、B類の**モト**には上下性と支配性が含意される（2.1 参照）。そのため、(36a) の例は、〈支配を受ける範囲〉もしくは〈鈴木先生の指導を受けて〉という意味になる。一方、(36b) には上下性も支配性も含意されず、代わりに「指導」が時間的幅を持った解釈となる。

また、このB2類には、次の (37) のように前接部分の行為「指導」の主体が明示されない場合に、**ナカ**は非文にならず、**モト**は非文になるという違いもある。

(37) 指導の {***モト**／**ナカ**} で生徒たちは多くを学んでいる。

以上、前接部分がB2類の場合に**モト**と**ナカ**が類義表現になる場合、ならない場合があることを指摘した。さらに、類義表現となる場合にも、両者に含意されているものや解釈には違いがあり、したがって表現効果も異なるのである。

4.1.4 前接パターン：B3類

次に、B3類（支配的な状況や環境）の場合を考察する。

(38a) 厳しい状況の**モト**で、子どもたちはがんばっている。

(38b) 厳しい状況の**ナカ**で、子どもた

ちはがんばっている。

この (38) のケースは、本論文の冒頭（例文3、4）で指摘したように、厳しい状況のモト、厳しい状況のナカがともに述部の行為が行われる場、範囲を指す意味になり、一見すると同義のように解釈される。それは、前接部分の名詞Xの主体が表されないことにも原因がある。Xの主体が示されないことにより、述部Vの主体にも制約がなくなるためである。しかし、B2類の場合と同様、類義表現ながら、(38a) は、上下性と支配性が含意され、〈状況の影響を受ける範囲〉という意味に、(38b) は、〈状況の内部〉という意味になる。ゆえに、B2類と同様、両者には表現効果の違いがある。

4.1.5 前接パターン：B4類

次に、B4類（理想・目標などの思考）の考察を行う。

(39a) 彼の考えたスローガンの**モト**で
業界トップの座を狙う。

(39b) ?彼の考えたスローガンの**ナカ**
で業界トップの座を狙う。

上の (39a) が許容され、(39b) が不自然な表現となるのは、この類に属する名詞（思考など）のとらえ方が異なるためと考えられる。つまり、**モト**の場合はスローガンが概念的なものととしてとらえられ、その支配を受ける範囲で人は活動が可能だが、**ナカ**の場合はスローガンが概念的ではなく物理的にとらえられ、その内部における行動V（「トップの座を狙う」こと）が奇妙に感じられるのである。

しかし、(40) の「意図」のように述部Vの主体が概念的なものなら許容される。

(40) 彼の考えたスローガンの**ナカ**に
彼の意図が隠されている。

4.1.6 前接パターン：C類

C類に属する名詞は、実際に存在する人や物である。したがって、A類と同様、両者は類義表現とならない。

- (41) {患者の**モト**に／*患者の**ナカ**に}
救急車が到着した。

4.2 形式に関する比較

前接部分の形式特徴の違いは3.2.1に述べたとおりである。**モト**は名詞以外の品詞をほとんど許容しないという特徴があった。それに対し、**ナカ**はどの品詞も偏りなく許容するという特徴があった。

後接助詞の形式特徴については既に述べたが、ここであらためて整理して両者を比較する。なお、比較の観点は前出(イ)～(二)と同様だが、比較の結果をわかりやすく示すための表現にした。

【表4】～モトV／～ナカVの後接形式の比較

比較の観点	～モトV	～ナカV
(イ) 本来二格がその他の格に交替可能か	不可	不可
(ロ) 本来デ格が無助詞に交替可能か	常に可能	一部可能
(ハ) 無助詞が何格に復元可能か	デ格	デ格／ヲ格
(二) 本来デ格が二格に交替可能か	一部可能	不可

両者に共通する特徴は、本来二格が他の格に交替しないという点であった(イ)。一方異なる特徴を示したのは、(ロ)(ハ)(二)の観点であった。以下に、これらの結果から推察されることを示す。

- ① 本来二格を要求する動詞とともに用いられる場合(イ)は、**モト**も**ナカ**も名詞句として扱われる
- ② **モト**は、デ格から無助詞への交替を常に許し(ロ)、かつデ格から二格への交替を一部許す(二)ことから副詞句としての機能を持つ

- ③ その逆に、**ナカ**は副詞句ではなく名詞句の可能性が高い(ロ)(二)

- ④ 但し、**ナカ**については無助詞化する場合もあること(ロ)(ハ)から、副詞句ではないとはいき切れない

以上の後接助詞の分析結果より、**モト**は、自身の作り出す名詞修飾句が、副詞的にふるまう可能性が高く、その場合〈Xの支配を受けて〉という意味になる。一方、**ナカ**は、名詞句としてふるまい、単にある範囲を示すことが多い。したがって両者は異なる印象を与え、表現効果も異なると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本論文ではこれまで類義表現とは考えられていなかった**モト**と**ナカ**という語に関して、それらが名詞修飾句の底の名詞となり、かつ副詞的にふるまう際に類義表現として解される根拠を、意味と形式の面から明らかにした。また、一見同義のようにみえる表現について、実際にはそれぞれの表現の含意が異なることも、意味の面、形式の面から同様に明らかにした。具体的には、B2類の一部および状況や環境といったB3類の語が**モト**および**ナカ**の前接部分Xとなる場合、「Xの**モト**」、「Xの**ナカ**」がともに述部Vの範囲を指し、Vが同じ主体をとり得ることから同義のように解釈されると指摘した。しかし、「Xの**モト**」という表現には、支配の上下のメタファーが働き、上下性と支配性が含意される。一方、Xの**ナカ**にはそのような含意はない。したがって、両者には表現効果の違いがあることも明らかにした。

さらに、後接助詞デ格の二格や無助詞

への交替現象の考察より、**モト**がより副詞的に解釈されること、一方**ナカ**はより名詞性を有していることを指摘した。その結果、前接する名詞句の意味の場合同様、後接助詞の面からも表現効果が異なる可能性があることも指摘した。

今後の課題は、**モト**や**ナカ**以外の名詞の副詞的用法にも対象を広げることである。具体的には、上下性に関係のある**モト**と**シタ**や**ウエ**、存在場所を表す**モト**と**トコロ**、内部を表す**ナカ**と**ウチ**といった類義表現について、どのような表現効果の違いがあるのか、本研究の結果を踏まえ、明らかにしていきたい。

注

- 1) 用例抽出の際、コーパス全11ジャンルのうち、Yahoo!知恵袋・Yahoo!ブログ・韻文の3ジャンルは除外した。
- 2) 方(2008)は、**モト**の前接名詞を空間性の有無で分け、各形式に現れた意味を記述し参考になる。ただし、空間性の有無の判断基準は示されておらず、前接名詞の意味の関連性には触れていない。
- 3) 長谷部(2010b)では前接名詞の意味的関連性と後接助詞に注目し、**モト**の副詞的用法における包括的な分析を行ったうえで用法記述の問題点を指摘し、教育面での示唆を与えた。
- 4) 名詞の具体的な語例は別稿を期す。
- 5) この用例数約7000例と表3の用例数(6202例)に開きがあるのは、表3では「Xの**モト**」の数をひらがな表記「もと」に限定しているためである。
- 6) ここで言う「本来二格」とは、[目的地] 二行く、[場所] 二ある、[場所] 二

現れるといった表現にみられる二格を指す。本論文で「本来二格」と判断する際には益岡・田窪(1992:76-77)に挙げられた用法を基準として用いた。

- 7) 「情勢的なむすびつき」を示す二格とは、動作時の状況を示すもので「風のなか**ニ**蝶が一羽ひらめいた」のような例である。言語学研究会(1983)では、この場合の交替現象を論じている訳ではないが、状況を示す**デ**格があることも指摘している。また、「古くささ」の二格とは、「山**ニ**遊ぶ」のように文体的な古めかしさを感じさせる二格である。これは、現代においては「山**デ**遊ぶ」と**デ**格で表すのが一般的である。
- 8) 時間の経過とともに変化・進行する行為を含むものをコト的、時間の経緯を含まないものをモノ的というのは、『岩波古語辞典』の記述に着想を得た。

参考文献

- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎(編)(1990)『岩波古語辞典 補訂版』岩波書店
- 言語学研究会(編)(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 寺村秀夫(1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その4—」『日本語・日本文化』7. 大阪外国語大学留学生別科(『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』pp.297-320. くろしお出版に所収)
- 鍋島宏治朗(2008)「現実と理想のメタファー—主観性および身体性との関連から」篠原和子・片岡邦好(編)『ことば・空間・身体』pp.213-252. ひつじ書房
- 長谷部亜子(2010a)「多義語**モト**の意味

分析－プロセス性の観点から』『表現研究』92, pp.52-61.

長谷部亜子 (2010b)「多義語モトの非プロセス用法をめぐる」2010年度日本語教育学会秋季大会予稿集pp.165-170
方允炯 (2008)「空間を表す形式名詞の意味と機能」大阪大学大学院2008年度博士学位申請論文
益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版

用例出典

現代日本語書き言葉均衡コーパス検索デモンストラーション (2011.6.28現在)

http://www.kotonoha.gr.jp/demo/search_form

付記

本稿は、第48回表現学会全国大会での研究発表を加筆修正したものである。本稿の執筆にあたっては研究発表での質疑および査読の方からのご指摘が大変参考になりました。謹んでお礼申し上げます。

(愛知学院大学大学院生)

◇表現研究関係文献紹介

新野直哉著『現代日本語における進行中の変化の研究 「誤用」「気づかない変化」を中心に』(ひつじ書房、平成23年2月刊、¥6,400+)

「役不足・なにげに・全然・いやがうえにも・かえりうち・ていたらく・万端・適当・のうてんき」。こう並べられたら、思い当たることがあるはずである。どれも、「誤用」あるいは「気づかない変化」が進行中のことばである。

本書は、これらの語を各章に分けて、マスコミで誤用としてよく取り上げられるものについては、その由来や、誤用という認定自体を鋭利に問い、その用法の変化がほとんど一般には意識されていないものについては、使用の実態や歴史を周到に明らかにしている。

徹底した用例の探索と記述による、このような現代語研究は、まさに現在の語であるゆえに、使用者の意識・心理や表現価値が透けて見えるという点で、きわめて表現学的でもある。今回のような成果は、過去に例のないものであり、今この分野において、著者の右に出る者はいないであろう。

「終章 本書をまとめるにあたって」の最後に、こう記されている。「学術図書というものは、学問の進歩のために捧げられるべきものである。それを承知のうえで、それに背くことをご容赦いただきたい」。この、思わず胸を打たれる、謙虚さと爽やかさはいったい何なのだろう。正統な？学問領域から外れているという自覚があるからこそ、いちずに目指され、成し遂げられることがあるということではないか。

(半沢幹一)